

連載
第58回

福聚山史

池浦 泰憲 文
及川 一晋 編

『町方書上』にみる

常円寺と成子町

常円寺の歴史において特に重要な史料は、『御府内備考』である。『御府内備考』は、文政九年（一八二六）江戸幕府により編纂が開始された『新編御府内風土記』の準備調査史料としてまとめられたものである。具体的には、まず江戸の各町名主、寺社に提出を命じ取り纏めた『町方書上』『寺社書上』を基とした。

これらの記録をめぐっては、すでに篠原重一氏によって詳細な読解・分析がなされており（当連載 第五回 平成十四年夏）、その考察を基に『福聚山史』（平成二十四年刊行）でも述べられている（川上大隆氏執筆）が、今回は『町方書上』に注目しながら、あらためて取り上げてみたい。

●『町方書上』

これらの『書上』の調査は、文政八年（一八二五）から同十一年（一八二八）にかけて行われたといわれる。『寺社書上』には、縁起や伽藍や祀られた本尊等、それらの大きさや由緒などの詳細な情報を、各々の寺社の関係者が幕府の求めに応じて提出したものと考えられている。

一方『町方書上』は、各町の町名主によりまとめられている。原本の筆跡が各々違うことから、それぞれの町の名主が自ら記し提出したものと考えられている。

いる。したがって、何を書くかということが幕府から詳細に指示され、まとめられたものといわれる。そして、その内容は、江戸城からの方角と距離に始まり、町の起立について、町内の広さ、隣町の名、町内の家の数など、基本的な情報のほか、川や坂の有無などの地理的情報、下水設備など生活に密着した情報、神社や歴史的な史蹟などの情報が記される。

●「柏木成子町」の『町方書上』

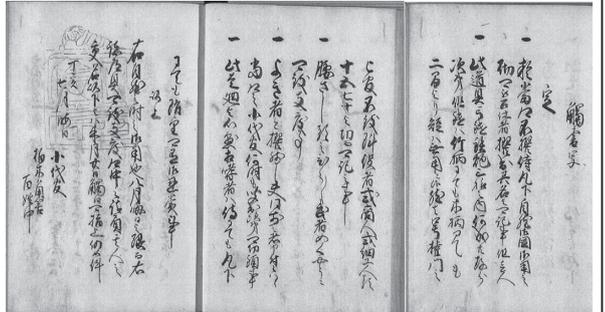
「柏木成子町」の『書上』にもこうした情報が詳細に記されている。常円寺は「成子」という町名の起りの記述に登場する。「成子」という地名が、この地に常円寺を「起立した」「源左衛門」という人物の店先かけられた「鳴子」に由来するという。これについてはこれまですでに触れられてきたところである。

ところで、この書上を提出したのは「紋右衛門」という名主であった。紋右衛門は『書上』に自分が成子町の名主である由緒を次のように記している。

一 名主役之儀は先祖川本李右衛門と申す者より数代相続仕り、既に天正十五丁亥年小田原北条家よりの触書等所持罷在候え、それ以前より相勤め居候儀にも御座あるべく候。尤も往古より持ち伝え候武器、左の通りに御座候。

この記述によれば、成子町の名主役は、紋右衛門の先祖である「川本李右衛門」という人物から数代にわたって勤めているという。また、紋右衛門は、天正十五年（一五八七）に、当時小田原城主で、関東の有力大名

『町方書上』に記された北条氏（氏直）発給とする触書の写し。「虎の印判」といわれる北条氏の朱印も再現されている。



代官 柏木角筈 百姓中」に充てられたこの文書は、柏木角筈の「百姓」から、人や武器を調達する趣旨であることがわかる。この「丁亥年」は天正十五年当時、北条家の当主であった氏直と、全国統一を進めていた豊臣秀吉の間で緊張が高まってきていた時期で、氏直は来たるべき時に備え、軍備を増強していた時期である。したがって、この触書はそうした北条氏の軍事増強の具体的な史料と考えられる。『書上』には触書の写しとともに「鎧」や「甲」などの武器・防具も列挙されているが、これらは、北条氏のお触れに紋右衛門の先祖が応じ、その際に用意した品々なのであろう。『書上』には、町内で古い家筋で由緒系図・古書物・古器物などを所持する者、孝行奇特・忠義によつて褒美を下された者なども記されているという。これらの紋右衛門の先祖に関する記述は、その真偽はともかく、単なる町内の古跡の情報というだけでなく、特に紋右衛門にとつては、成子町における名主役を相続しているという自分（一族）の由緒の根柢を示

すという意義もあつたのではないだろうか。●成子町における常円寺 これに続けて『書上』には、常円寺を起立した「源左衛門」に関する記述がある。これもすでに触れられてきたところであるが、「常円寺開基」である源左衛門は、寛永十七年（一六四〇）正月十六日に病死し、戒名が「本源院圓信士」であること、しかもその位牌があり「田中源左衛門」と俗名が刻まれていること、そして、その後、子孫が続いたものの、寛政年中（一七八九〜一八〇一）に、町内に住んでいた「伊太郎」という人物が病死し、一族は「退転」し途絶えたとされている。常円寺が、天正年中に幡ヶ谷から移転してきたことは、『寺社書上』から知られることであるが、ここでの「開基」とは幡ヶ谷からの移転建立の主ということである。そして、常円寺開基である田中源左衛門については、町の「起立」においての具体像はわからないけれども、町にとつては「當町草創」つまり成子町の始祖として位置付けられている。このことは、当時、町を取り仕切る名主役としての紋右衛門（一族）の由緒の一方で、町の起点として大事な由緒であつたのではないだろうか。しかし、この『書上』を記した文政十年において、源左衛門に続く一族は途絶え、町の起点の記憶を体現する人物はいなくなっていたけれども、源左衛門を開基とし、おそらく位牌や戒名など、源左衛門の記録と記憶を留めていたであろう常円寺が存在していた。そこで常円寺は「當町草創」の主と結びつけられ、その記憶を体現する、成子町にとつて由緒の原点とされたのではないだろうか。『町方書上』における常円寺の記述からは、そうした成子町と常円寺の関係が考えられるのである。